

レポート採点基準の開発と大学の一般教養科目で 学生の文章力を向上させる取り組み

和田 正 法

要 約

本稿は、大学の一般教養科目において学生の文章力を向上させる取り組みの実践報告である。また、それを可能にするレポート採点基準を提案する。

筆者は、作文教育について、次のような三つの根本的な問題があると考えている。(1) そもそも作文教育が未熟である。日本の教育システムでは、作文の教育がまったくなされていない。そのため、大学の授業でレポート課題を出題しても、提出されるレポートはひどいものが多すぎる。(2) レポート課題の評価は信頼性が低いと考えられている。採点者の主観が入るために、公平性に問題があると一般に受け取られている。学生は何を評価されるのか分からないまま、とりあえずレポートを書く。(3) 採点作業に多大な労力が必要である。教員にとって、レポート課題は採点に多くの労力を費やさねばならないため、レポート課題を広く導入することは現実的ではない。

これらの問題に対して、次の2点を行うことで改善できる。(1) チェックリストを設け、それをレポートの評価基準にする。明確な目標を示すことが、学生に成長につながる。また教育の質を保証することができる。(2) 学生を訓練することで作文教育の充実を図る。小論文を繰り返し練習させることで、学術的文章の基本を習得させる。ピアレビューを取り入れると、読者の視点を得ることを可能にし、さらに教育効果が上がる。これら、チェックリストによる採点法を採用し、訓練による文章力の向上を図ることで、結果的に採点時の大幅な省力化が可能になる。つまり、教員の労力を減らしながら、学生の文章力は向上する。こうした取り組みを、筆者が2015年度前期に三重大学で担当した科学史・科学論の授業(計4コマ、受講生計120人)で行った。本稿が示す取り組みを大学で幅広く導入することで、学生の文章力は飛躍的に向上するであろう。

はじめに

筆者は2014年に、文章力を向上させる方法を『作文がうまくなる訓練方法』(以下、『作うま』)において提示した¹。この方法論に基づく作文教育を、筆者が2015年度から三重大学で担当している2種類の教養科目「自然科学概論／科学技術の歴史」と「現代科学理解特殊講義／科学技術と社会」(それぞれ2コマ、計4コマ)で実践した²。本稿は、その実践報告である。

筆者が行った授業の特徴は、次のような点にある。

- 通常の教養科目(科学史、科学論)である。
- 序盤に2回の小論文(1000字)で練習させ、レポートの骨格を習得させる。
- 計4回のレポートを課し、段階的に難易度を上げる。
- 授業テーマに関する3000字の最終レポートを書かせる。
- 採点はチェックリストで行う。これは初回の授業で学生に提示する。

小論文による訓練方法

『作うま』では、小論文による訓練を行うことで、レポートや論文の基礎力を付けることを提案した。本節ではその方法の概要を紹介しておこう。

訓練が必要

レポートを書く力を養成する訓練の題材として、1000字程度の小論文を用いる。

文章力を上げるには、訓練が必要である。分かりやすい文章を書くためにはパラグラフ・ライティングを習得する必要があるが、教員がパラグラフ・ライティングとは何かを説明することは容易でも、それを実際に学生に習得させることは容易ではない。このことを野球に喩えれば、甘い球が来たらバットを思い切り振ればよいということは誰でもすぐに理解するが、その説明を聞いただけでは誰もヒットが打てるようにはならないのと同じである。レポートについても採点基準を説明しただけでは、多くの学生はそれをクリアする文章を書けるようにはならない。

訓練には単純な題材がよい。文章の執筆についても、卒業論文といった大きな作品を一つ作る経験をさせるまえに、単純なものを繰り返しやらせて、失敗も含めてさまざま訓練させることが教育効果を高めると筆者は考えている。多くの学生は、文章の構成に問題を抱えているが、はじめから高度な課題を与えると、構成に問題があることが見えにくくなり、結果的に基礎的な力が伸びずに終わる。文章の訓練のために大学のレポートや卒業論文を用いようとすると、調査力や問題発見能力・解決能力といった高度な能力が要求されるため、かりに文章に問題があったとしても、どこに原因があるのか分かりにくい。そのため、多くの調査や知識を必要とせずに、思考力や作文力があれば一つの文章を書きあげられる題材がよいのである。表1にあげた種類の文章は、どれも構成が同じなので、大学のレポートや学術論文の構成を学ばせるには、小論文が最適である。

チェックリストが実用的

基準はどのようなものがよいか。教員が採点しやすいことはもちろん、教育現場で使うのであれば学生にも分かりやすい基準がよい。さらに、自己学習を可能にし、総合的な教育効果を高めることが

表1 訓練のための文章比較

文章の種類	小論文	大学のレポート	学術論文
文字数	1000字	5000字	2万字
費やす時間	1時間	数週間	数か月以上
能力	思考力 作文力	思考力 作文力 調査力	思考力 作文力 問題発見能力 問題解決能力
要件		文献引用 実験や実地調査	オリジナリティ 先行研究の調査 実験や理論構築

出典：拙著『作文がうまくなる訓練方法』

表2 小論文の評価基準と教育現場における実用性

方 式	採点の 労力	点数の 根拠	自己 学習	教育 効果	志向	備 考
レーダーチャート (木下式)	×	△	△	○	汎用	変更が容易。
ループリック (大学入試)	××	△	×	×	随筆	複雑すぎて採点が困難。何を測定したいのか明確ではない。
総合採点 (TOEFL ライティング)	◎	◎	×	×	学術	試験の趣旨に則っている。教育が別に充実している。
チェックリスト	○	◎	○	◎	学術	変更が容易。

◎優れている、○良い、△不可能ではない、×困難、××非常に悪い

評価の方式について、次のものを参照した：レーダーチャート方式は、木下是雄『レポートの組み立て方』筑摩書房、1994年、226頁の文章評価用のものさし。ループリック方式は、「推薦・AO入試の基礎知識、小論文」『螢雪時代』2013年6月号、109頁から「国立A大学教育学部」の小論文採点票。総合評価方式は、Educational Testing Service原著（林功日本語版監訳）『ETS公認ガイド TOEFL iBT 第4版 CD-ROM版』The McGraw-Hill Companies, Inc.、2013年からTOEFLライティング課題の評価基準。チェックリストは、拙著『作文がうまくなる訓練方法』から。

できるものが望ましい。文章の評価基準にはさまざまあるだろうが、小論文について従来から提示されていたもの3点と、筆者が提示するチェックリストについて、教育への実用性という観点から比較したものが表2である。

この評価は、筆者の経験に基づく相対的比較であって絶対的な基準があるわけではないが、教育現場で用いるには、チェックリスト方式が最も優れている。レーダーチャート式は、項目が簡単であるため、ループリック方式よりも採点の労力が少ないものの、点数の根拠にやや難点がある。ループリック方式は、ここでは「国立A大学」の入試で用いられている採点票を検討したが、教育現場で用いることは難しい。採点者にとっても、小論文提出者にとっても、良い点がない。あくまでも、入試という特殊な状況で、採点のみを目的とした利用にとどまる。TOEFLに用いられる総合採点方式は、採点の労力が少ないという点が優れているが、自己学習に用いさせたり教育効果を上げたりという点において、チェックリストには及ばない。

このような検討を経て筆者は独自のチェックリストを開発し、『作うま』で提示した。それは、10項目の「書き手のチェックリスト」と、7項目の「読み手のチェックリスト」から成り立っている。「書き手のチェックリスト」とは、書き手である学生が自分で簡単にチェックできるリストという意味であり、構成を主眼としている。それに対して、内容面は書き手が自分でチェックすることが難しい。読み手の視点で判断が求められるこうした文章の内容に関する基準を並べたものを「読み手のチェックリスト」と呼び、上級者用と位置付けている。チェックリスト項目の詳細は次節であらためて紹介する。

ピアレビューによる確認作業

まず、書き手のチェックリストを用いて、書き手自身に構成を整えさせる。構成が整うと、読みやすい文章になる。すると論理的弱点も明らかになるため、その後の改稿が容易になる。さらにピアレビューを行うことで、読み手の視点を取り入れることができるようになる。小論文程度であれば、学生同士でも十分に信頼性の高い採点ができる。教員は、学生間の採点作業がうまく機能しているかを

確認すればよい。ピアレビューを導入することで、教員が多くの労力を割くことなく、学生の文章力を大きく向上させることができる。こうした作業を行わせるためにも、明確な評価基準が必要になる。

原稿を読んでもらう相手は素人がよい。良いものを良いと判断するのは外人でも難しいのだが、ダメなものをダメと判断する能力は素人にも十分にあるので、原稿を読んでもらう相手が素人でも確認作業ができる。いきなり教員が読むと、ほとんどの学生は教員にコメントをもらったという事実安心してコメントの中身を精査しない。教員が苦勞して真摯に対応しても、学生への教育効果は低い。教員がコメントするにしても、その前に友人3人にコメントをもらわせた方がよい。

授業の実際——シラバスの編成例と成績評価の実際

本節では、授業の実際を報告する。学生が質の高いレポートを提出することを目標として、筆者は前節で示した方法論を通常の教養科目に取り入れることを試みた。ここで報告する授業は、三重大学において2015年度前期に筆者が担当した2種類の教養科目「自然科学概論／科学技術の歴史」と「現代科学理解特殊講義／科学技術と社会」（それぞれ2コマ、計4コマ）である。受講者の合計は120人であった。2種類の授業は、内容はもちろん異なるが、レポート課題の質と分量、授業の運営形態は同一である。

シラバスの概要

15週にわたる授業計画のうちレポートに関する部分は、いずれの授業でも次のようになっている。

【授業計画】

第4週 第1回小レポート提出期限、授業内でピアレビュー

第6週 第2回小レポート提出期限、授業内でピアレビュー

第9週 中間レポート提出期限

第13週 最終レポート提出期限

第4週と第6週は、授業時に小レポートを印刷して持参させ、ピアレビューを行う。学生には自分の原稿に対して2人の同僚（学生）にチェックを受けさせる。小レポートを提出させる回は、通常の講義を60分ほど行ったあと、ピアレビューのやり方の説明と実際の作業に30分ほど時間をとった。第9週に提出される中間レポートと、第13週に提出される最終レポートは、教員が採点した。

レポート課題と、配点（100点満点）は次の通りである。ここでは、「現代科学理解特殊講義／科学技術と社会」（2015年前期）のものを示す。これらの課題と配点は、第1週のガイダンスで配布するシラバスに記載したものである。

【レポートの課題と配点】

第1回 小レポート（分量1,000字程度）、課題「コンピュータは、生活を簡単で便利にしたと考える人と、生活を複雑でストレスが多いものにしたという人がいる。あなたはどちらの意見に賛同するか。」

10点（提出点5点、内容点5点）

内容点：書き手のチェックリスト5点、2つで1点

第2回 小レポート（分量1,000字程度）、課題「コンピュータは、生活を簡単で便利にしたと考え

る人と、生活を複雑でストレスが多いものにしたという人がいる。あなたはどちらの意見に賛同するか。」これを、第1回小レポートで自分がとった立場とは逆の立場から論じなさい。

10点（提出点5点、内容点5点）

内容点：書き手のチェックリスト5点、2つで1点

第3回 中間レポート（分量2,000字程度）、課題「初等・中等教育（小学校から高校まで）では、スマートフォンを積極的に用いるべきだ。この主張に対するあなたの意見を述べなさい。」

30点（提出点10点、内容点20点）

内容点：書き手のチェックリスト10点、1つ1点

読み手のチェックリスト5点、1つ1点で最大5点

（自分の意見を示すのに）必要十分な学術的根拠がある 5点

第4回 最終レポート（分量3,000字以上）、課題「科学論を専門としない学生が科学論を学ぶ意味は何か。あなたの専門分野への関心に触れながら、科学論を学ぶことがあなたの現在や将来にとって有意義になることを説明しなさい。」

50点（提出点10点、内容点40点）

内容点：書き手のチェックリスト10点、1つ1点

読み手のチェックリスト20点、1つ3点（7つ目は2点）

（自分の意見を示すのに）必要十分な学術的根拠がある 10点

筆者は、採点が公平であることを示すため、シラバスにこの内容を記載し、第1週のガイダンスで周知している。どのようなチェック項目があり、自分のレポートで何が不足すると何点減点されるのか、学生は明確な基準を早い段階で知っておいた方がよいと筆者は考えている。学生にとって、それを理解し習得するのは時間と労力の問題であり、努力すればすべての学生の文章力は確実に向上する。つまり、教育の質の保証と向上を達成することができる。

レポートは段階を重ねるごとに難易度が上がる。小レポート2回には、その後の中間レポート、最終レポートに向けての練習という意味を持たせている。小レポートは、構成の習得に集中させるためにも、単純なテーマにしている。さらに2回目は、1回目と同じテーマを逆の立場から書かせることで、いわゆる正解の無い問題についてさまざまな立場があることを理解させるという狙いがある。中間レポートは、最終レポートで必要十分な学術的根拠を述べさせるための練習として欠かすことができない。

課題はいずれも授業のテーマに沿ったものであるが、そこで求めているのは、論理的な文章を書く能力だけである。いずれの課題でも学生の倫理観は一切求めていない。たとえば最終レポートの課題で、科学論が全く役に立たないという立場をとっても一向に差支えない。このことを出題時に強調し、自由な発想を求める（ただし、こうした論旨で論述を行うことは相当に困難であるし、これまでにその立場から論じた学生はいない）。こうしたレポート課題を与えることで、カリキュラムや学問の全体像を意識させながら、本授業の意義を見出すことを個々の学生に求めた。毎回の授業では、科学論が必須の教養であるという前提に立ち、個々のテーマを分析して示すことで、学生の視野を広げることを狙っている。

各レポートの配点について、いくらかの試行を経て、現在では、2回の小レポートをそれぞれ10点、中間レポートを30点、最終レポートを50点としている。様々な条件が異なるため単純比較ができないのだが、筆者のこれまでの経験では、小レポートによる練習を複数回経験させた方がその後提出さ

れるレポートの質が高くなる。

中間レポートと最終レポートの内訳には4項目を設けている。このうち、最終レポートの場合、提出点に10点、書き手のチェックリストに10点、読み手のチェックリストに20点、学術的根拠（学術点）に10点を割り振っている。チェックリストについては、チェックが付いた項目数をそのまま点数化することで、容易に授業の成績評価に換算することができる。これらの配点は、授業の目的と教育方針によって変更することが可能である。

内訳には、学術点として必要十分な学術的根拠を求める項目を設けている。書き手のチェックリストと読み手のチェックリストをそろえると、十分に読み応えのある質の高いレポートになるが、筆者が試みたのは単なる作文教育ではなかったため、『作うま』で示した小論文の採点基準とは別に、授業の方針に応じた学術的内容を盛り込ませる必要があった。「必要十分」な根拠とは、学生が主張する内容によって当然その質と量は異なるものの、基本的に書籍3冊を目安にするように指導している。もちろん、1冊でも必要十分と認められる場合もあるだろう。いずれにせよ、読み手を説得することがレポートや論文の主眼であるから、読み手が基準になるということを十分に指導する。

授業全体では、次のような達成目標を掲げている。個々の目標に対してA、B、Cの評定はあくまでも目安として示しているが、本授業では、結果的にチェックリストに基づく採点と整合性が取れていると筆者は認識している。

【達成目標】

- ・ 科学技術が社会の中で生じる問題があることを理解する（C 評価）
- ・ 多面的な視点から科学技術の進展を理解し、論じることができる（B 評価）
- ・ 科学技術と社会の問題に関して、自らの考えを表明し、論理的に説明することができる（A 評価）

レポート課題の配点と、評価項目の配分をまとめたものが表3である。100点満点中、提出点と書き手のチェックリストをそろえると合格点の60点を超える。課題に正面から取り組み、構成が整ったレポートを提出すれば獲得できる水準である。技能のうえでは、パラグラフ・ライティングができれば授業に合格できる。この水準は暫定的なものである。今後、ほかに作文教育を受けるなどして多くの学生のレポート執筆力が本授業の受講時に十分についていることが分かれば、読み手のチェックリストと学術点の配分を高めることができるようになるだろう。逆に、一般的なレポート課題は、（レポートをきちんと書けることを前提にして）主に学術的な内容で評価するものであるから、学術点の

表3 レポート課題の配点

レポート課題	内訳				配点
	提出点	書き手の チェックリスト	読み手の チェックリスト	学術点	
第1回 小レポート	5	5			10
第2回 小レポート	5	5			10
第3回 中間レポート	10	10	5	5	30
第4回 最終レポート	10	10	20	10	50
計	30	30	25	15	100

配分が高いものと理解することができよう。つまり、本稿が提示する授業は、構成面の配分を高めることで、レポートの基本的なレベルの底上げを意図するものである。

レポートの採点票

最終レポートの採点票を図2に示す。小レポートと中間レポートの評価も、この最終レポートの採点票が元になっている。第1回と第2回のレポートでは、この採点票の一部分「書き手のチェックリスト」を抜き出して、学生の文章力を向上させる訓練を行っている。中間レポートは、表3に示した

最終レポート用採点票	
満たしているものには■チェックを入れる	
提出点	<input type="checkbox"/> 締切までに提出 (10点)
書き手のチェックリスト (各1点、最大10点)	
序論	<input type="checkbox"/> (1) 宣言文があるか <small>※この項目を無視する場合には、以下は採点項目とならない</small> <input type="checkbox"/> (2) 立場を表明しているか (結論) <input type="checkbox"/> (3) 本論各段落の内容を予告しているか
本論	<input type="checkbox"/> (4) 話題ごとに段落を分けているか <input type="checkbox"/> (5) 各段落の冒頭に話題文があるか <input type="checkbox"/> (6) 各段落の話題の大きさはそろっているか <input type="checkbox"/> (7) 各段落の話題に重複はないか <input type="checkbox"/> (8) 段落内に話題とは異なる話がないか
全体	<input type="checkbox"/> (9) 指定された文字数 (3000字以上) はあるか <input type="checkbox"/> (10) 分かりにくい文はないか
	_____点
読み手のチェックリスト (各3点、最大20点)	
	<input type="checkbox"/> (1) 問いに対して効果的に答えているか <small>※この項目を無視する場合には、以下は採点項目とならない</small> <input type="checkbox"/> (2) 明確な立場をとっているか <input type="checkbox"/> (3) 構成・展開は十分か <input type="checkbox"/> (4) 適切な説明や事例を述べているか <input type="checkbox"/> (5) 首尾一貫しているか <input type="checkbox"/> (6) 単調ではないか <input type="checkbox"/> (7) 適切な用語を用いているか
	_____点
学術点	<input type="checkbox"/> 必要十分な典拠を示しているか (最大10点) <input type="checkbox"/> 不足 (▲5点) <input type="checkbox"/> 偏っている (▲5点)
	_____点
レポートの基本的作法に則らない減点	▲_____点
総計 _____点 (50点中)	

図2 最終レポートの採点票

ように点数配分を変えている。

書き手のチェックリストは、筆者が独自に作り上げたものである。読み手のチェックリストは、英語の試験 TOEFL のライティング部門で満点である 5 点を得るための基準を参照して、筆者が項目化したものである⁴。

それぞれのリストの一番目の項目には注を付しており、「※この項目を無視する場合には、以下は採点項目とならない」ということを伝えている。それというのも、課題とは異なる内容の文章であっても、構成とそれなりの内容が整っていれば、合格点に達する恐れがあるからだ。課題に沿ったレポートでなければ採点を行わないことを取り決めておく必要がある。

ここで使っている用語について、若干の補足説明をしておこう。書き手のチェックリスト項目 (1) にある「宣言文」とは、英語では thesis statement と呼ばれるもので、当該文章が何のために書かれたのか、その目的を示す一文を指す。レポートでは、宣言文が序論（原則的に第一文）にあることを要求している。項目 (5) にある「話題文」とは、英語では topic sentence と呼ばれるもので、当該段落を要約した一文を指す。レポートでは、話題文が各段落の冒頭に来ることを要求している。

一般に、アウトラインが文章の質を大きく左右する。書き手のチェックリストでも項目 (3) から (8) までの 6 項目を話題（根拠）について尋ねており、アウトラインである話題の選び方が大切であることを、分かりやすく論理的に学生に習得させることができる。書き手のチェックリストを 10 個そろえて構成を整えると、学生はすぐに内容の改善に取り組むことができる。本授業はレポートの書き方を教えることが本来の目的ではないので、読み手のチェックリストをそろえられるかどうかは学生の能力と努力を待つしかないが、成績評価で優劣が付くポイントになる。

学術点は、文献を十分に調査して、その内容を盛り込んでいるかということの評価する基準であり、量的基準と質的基準によって評価するべきであろう。必要十分の文献が示されていれば、10 点を獲得できることになる。ここで、「必要十分」の判定は若干のあいまいさを含むようだが、これは書き手の基準ではなく、読み手の基準であると説明している。

学術面での指導について、ティーチング・アシスタントでも付かない限り、最終レポートを文章法の訓練の題材として用いることは、教員が割くことができる労力の点で難しい。現段階では、この項目は成績評価のための採点にとどまり、個別にコメントを求めてくる熱心な学生を除いて、繰り返し書き直しさせるといった教育的効果を持たせることはできていない。この意味でも、文章の構成について小論文とそのピアレビューによって学生の基本的な文章力を向上させておくことが重要である。

こうした基準を設けることで、知識量は十分でも、論理的構成が弱いといった減点が必要な箇所を、十分に説得的な理由で、しかも容易に説明することができるようになる。

採点の実際と機械的採点のための対処

実際には、レポートの質が落ちるほど、採点に労力と神経を使う。それゆえ、あらかじめ学生を小レポートで訓練して、彼らに判定基準をよく理解させ、中間と最終レポートの質を高めておくと採点作業の省力化につながる。筆者は、3000 字の最終レポートでは、1 通の採点に 3 分以上の時間をかけずに済んでいる。

上記の採点票では、書き手のチェックリストの項目 (6) 話題の大きさは適切かと、(7) 話題の重複がないかの 2 項目を容易に判定できるようになれば、採点の労力を大幅に減らすことができるようになる。逆に、この 2 項目がそろえられるように、授業中に丁寧に解説すればよいということでもある。(6) 話題の大きさと質的な観点からの基準であるが、実際には段落の文字数によってかなり正確に

判定できる。(7) 話題の重複は、初学者でも判別しやすいので、授業中に説明すると学生はすぐに理解する。学生には、この2つを満たすような話題（根拠）を見つけられるかがレポートの質を左右すると指導する。この2項目は、論理的展開に深く関連しており、これらが上手くいっているレポートでは、**読み手**のチェックリストの(3) 構成・展開は十分か、(4) 適切な説明や事例を述べているかという2項目も同時にチェックを入れられることが多い。

多くの学生は、文字数を指定されるとそれを満たすことに最大の意識を向けるが、それよりも全体の論理を整えることが重要であることを強調する。指定された文字数を下回る場合でも、項目(9) 指定された文字数はあるかというチェック項目一つ分の減点にしかならない。ただし、文字数が大幅に足りないと、**読み手**のチェックリストで、(3) 展開が十分か、(4) 適切な事例や説明があるかの項目に引っかかる可能性が高く、また典拠が十分でなければ、学術点にも影響する。

また、ピアレビューの経験を生かさせて、教員にレポートを提出するまえに他の誰かに読ませて批評を受けることを勧めている。すると学生は、締め切りよりも十分に早く初稿を書き上げる必要があることに気付く。こうした一連の作業を通して、学生のレポートを書く基本的な力を養成した。

おわりに

当事者の感想

結果的に、チェック項目の多くを満たすレポートが数多く提出された。チェック項目の内容に沿ってレポートを作成したために、主張が明確であり、その根拠を示すことに注力したことがよく伝わってくる。何が言いたいのか分からないという、採点をしていて最もストレスがたまるレポートはほとんどなかった。

筆者は、科学史・科学論の内容をはじめ、レポート課題の対処法についても、授業中や授業後に学生から意見を聞きつつ柔軟に対応するように心がけている。多くの場合は、レポートの書き方が分からないので丁寧な解説してほしいという要望である。ほかにも、書き手のチェックリストを意識してアウトラインを早い段階で固めることで、速く書くことができるようになったという感想を寄せてきた学生もいた。

2015年度前期に行った授業アンケートには自由記述の項目があり、作文教育に言及した回答もあったので、いくつか抜粋しよう。「先生に続けて欲しいと思うこと」という質問項目に対して、「レポートの書き方が分かりやすかったので続けてほしい」、「レポートは文字数が多いので大変だったけど、文章を書く訓練になると思うので続けてほしいと思う」、「他にレポートの書き方をここまで丁寧に教えてくれる授業はないので大変だった。しかし、最後の課題は難しかった」といった回答が寄せられた。その一方で、「自分が先生だったらしたいと思うこと」という質問項目に対して、「もうちょっと明確で考えやすいレポートの題材にしてほしい」という要望があった。

以上のいくつかの反応から、次のことを読み取ることができる。すなわち、(1) 他の授業では、レポートの書き方を丁寧に教えていない。(2) 課題が過大であると訴える学生がいる。とはいえ、(3) 総合的に、筆者の作文教育が役に立っており、それを本授業で教える意義が学生に理解されているといえよう。

筆者が出す課題は学生にとって楽なものではないと思うが、2015年度後期にも開講する同科目には、前期に受講した学生の評判を聞きつけて履修登録したという学生が何人かいた。

まとめと今後の課題

日本の学士課程においても初年次教育を導入するなどのカリキュラム改革が進められ、学生の思考力・判断力・表現力の養成が重視されている。筆者は、これらの力を養成するために学生に文章を書かせることが重要であると考え、担当する通常の教養科目においてレポートを課している。

本稿では、筆者が行う授業で用いるレポート課題の評価基準を報告した。一般に、レポートによる成績評価は基準が不明確であり、採点者の主観が入るため公平性に問題があると考えられているが、明確な評価基準の設定とその周知により、この問題を克服することができる。成績の基準を明確にすることで教育の質を保証することができるとともに、学生に目標を与えることで成長を促すことになる。筆者の授業では、本格的なレポート課題のまえに、単純な小論文によって学生にレポートの構成を習得させた。これにより学生の成長が見られるようになり、最終的に多くの質の高いレポートが提出された。

本稿が示した方法を導入することで、実際に学生の実力がどれほど向上するか、また教員の労力がどれほど軽減されるか、改善効果の定量的な検討は今後の課題としたい。また、本来の授業（科学史・科学論）の理解の深まりに関して、あらためて議論を行いたい。とはいえ、本稿が示したのは、学生の文章力を向上させる二点の取り組み——明確な基準を導入し、学生を訓練すること——はどの授業でも容易に導入することが可能だということである。この取り組みを大学で幅広く行うことで、学生の文章力は飛躍的に向上するであろう。

文献と注

- 1 拙著『作文がうまくなる訓練方法——小論文でレポート・論文の基礎力をつける』2014年、Amazon.co.jpから電子版を頒布している。
- 2 いずれも90分半期15回、2単位の授業である。受講対象者の制限はない。各回の内容は、シラバスを公開しているのでそちらを参照されたい（三重大学ウェブシラバス URL <http://syllabus.mie-u.ac.jp>）。同方法論に基づく作文教育は、2014年度から関東にある二つの大学の教養科目で導入を試みているが、その発展過程の詳細はここでは割愛する。
- 3 井下千以子『大学における書く力 考える力——認知心理学の知見をもとに』東信堂、2008年、11-22頁。
- 4 Educational Testing Service 原著（林功日本語版監訳）『ETS 公認ガイド TOEFL iBT 第4版 CD-ROM 版』The McGraw-Hill Companies, Inc., 2013年。

A Report on the Adoption of Evaluation Criteria for Essays in a General Class for Freshmen at a Japanese University

Masanori WADA

Abstract

This paper reports the author's efforts to improve the ability of freshmen students to write essays at a Japanese university. To achieve this goal, the author proposes criteria for evaluating essays. Japan has three problems to be solved in writing education. First, in the Japanese education system, students do not have a chance to learn writing systematically. Thus, college teachers are forced to read many immature essays. Second, students think that the evaluation of essays is unreliable because they feel it depends on a marker's biased assessment. As a result, students do not have a clear goal when writing essays. Third, there is too much labor required for teachers to evaluate those essays fairly. Thus, they are reluctant to introduce essays into their classes for grading. These three problems cause a vicious cycle in writing education. This paper provides two suggestions to improve the situation: (1) to adopt clear criteria for the evaluation of essays. The criteria will be a distinct goal for students, and give assurances about the reliability of the evaluation; and (2) to train students by writing short essays on a continuous basis to help them acquire basic skills of academic writing. The adoption of peer review among students also increases the effectiveness of writing education because it enables them to understand the reader's perspective. The implementation of these ideas improves students' ability to write without increasing teachers' labor. The author implemented writing education in two history of science and technology classes, and two science and technology studies classes at Mie University in 2015. The result shows that these two suggestions can be applied to any classes in which essays are included for grading.